

暇乞い

2025. 10. 17

まだまだ先のことだが、できればやりたいことがある。この世の暇乞い（いとまごい）である。

中学3年生の国語の教科書に『握手』という井上ひさしさんの作品が掲載されている。その中に、「この世のいとまごい」という表現がある。児童養護施設の園長先生だったルロイ修道士が、自分の死期を悟り、元園児である教え子たちに会いに行く。

何だかわかるような気がする。お世話になった方には感謝の気持ちを伝えたい。ご迷惑をおかけした方にはお詫びをしたい。私の場合は、お詫びのほうが多い。きっと、自分なりに区切りをつけたのである。気持ちの整理といったほうがよいかもしれない。

もちろん、具体的な行動は起こしてはいない。会わなければならない方々のリストアップもしていない。今まで音沙汰がなかったのに、急に会いに来られたら、どうしたのだろうと思われることだろう。「この世の暇乞いに来ました」というわけにもいかない。「残りの人生も短くなってきたので、こうやってお世話になった方々に挨拶をしてみわっているんです」とでもいうだろうか。これも一種の旅である。おもしろいかもしれない。

こういったことは、元気なうちでないとできない。旅行もそうである。歩くのにも不自由するようになれば実現はむずかしくなる。そう考えると、まだまだ先のことでもないような気がしてくる。

今のところの計画では、6年後には旅に出る。行きたいところに行く旅行である。一カ所に留まる長期滞在もある。海外も国内もある。目的地は、すでに決めてある。旅行の計画や準備に2年間をかける。たぶん、人生最後の大がかりな旅となる。用意周到さが求められる。今までのように、不十分な予習で、帰ってから復習しているようではいけない。

この旅行が終わったら、しばし休んだ後に、暇乞いの旅を始めようかと思う。一番遠い目的地はどこになるだろうか。沖縄にはいない。鹿児島には行かなければならない。北海道も行き先となる。観光が第一目的ではない。人に会いに行くのである。連絡先がわかるかどうかは定かではない。

ルロイ先生は、どのような思いで元園児たちに会いに行ったのだろうか。ルロイ先生は、自分の病気のことに触れてはいない。この世のいとまごいだと思ったのは、教え子のほうである。元園児たちが元気に過ごしている様子を見て安堵したのだろうか。

私の暇乞いが、教え子たちに会いに行くものとなれば、話は変わってくる。お詫びしかない。数も多すぎる。それはやめておこう。自分の人生が、第3コーナーをまわっていることは確かである。